

SHOW HEY シネマルーム

Data

監督：ダニエル・アルフレッドソン
原作：スティーグ・ラーソン『ミレニアム3 眠れる女と狂卓の騎士』
出演：ノオミ・ラパス/ミカエル・ニクヴィスト/レナ・エンドレ/アニカ・ハリン/ヨハン・シレーン/ターニャ・ロレンツソン/アンデルス・アルボム・ローセンダール/ゲオルギ・スタイコフ/ミツケ・スプレイツ

ミレニアム3 眠れる女と狂卓の騎士

2009年・スウェーデン映画
配給/ギャガ
148分

2010(平成22)年8月2日鑑賞

GAGA試写室

👁️👁️ みどころ

秘密を知りすぎた奴は消せ！それが秘密組織の鉄則だが、そう簡単に殺されたのではたまったものではない。瀕死の重症から復帰したリスベットを待ち受けるのは、殺人未遂罪の裁判闘争。ミカエルの妹が弁護士だったのは幸運だが、裁判で争うには証拠がなくっちゃ！

有罪の立証よりも、精神鑑定の力によってリスベットを精神病院へ。それが検察側の方針だが、そこに登場する精神鑑定医とは？3部ではハリウッドや日本とは異質のスウェーデンにおける法廷闘争の面白さをタツプリ堪能し、かつ学習したい。

人間ってなかなか死なないもの！特に長編映画では

五味川純平原作の『人間の条件』は、小林正樹監督、仲代達矢主演、全6巻で映画化されたが、その総上映時間は9時間38分。最終巻のラストは、梶上等兵が愛妻・美千子の名前を呼びながら、雪の中を1人日本に向かってさまよい歩く姿だったが、いつしかその足が止まり……。こうなると、いくら頑強な梶上等兵でも死亡まちがいなしと推測し、納得できるはず。

しかし、『ミレニアム』シリーズ2部のラストにおける、リスベット(ノオミ・ラパス)と元ソ連の情報機関GRUのスパイ、ザラ(ゲオルギ・スタイコフ)および巨大男ロナルド(ミツケ・スプレイツ)との凄惨な戦いは、リスベットもザラもわずかに生存の可能性を残していた。ロナルドは、あの時点でリスベットに対して反撃すれば逆襲は十分可能だったはずだが、警察の突入を予想したためかいち早く彼が逃げ出したのは、リスベットに

とってはラッキーだった。

『ミレニアム』シリーズ3部は、互いに瀕死の重症を負いながらも、かろうじて生き残ったリスベットとザラの確執がストーリー前半のテーマとなってくる。なるほど、人間ってなかなか死なないもの。特に長編映画では・・・。

知りすぎた奴は消せ！それが秘密組織の鉄則

リスベットがザラに対して斧を振り下ろしたことはまちがいないから、こりゃ明らかな殺人未遂罪？すると、瀕死の重傷から回復すれば、リスベットの身柄は病院から拘置所に移され、裁判を受けるのが当然。市川正一著の『日本共産党闘争小史』は、日本共産党が非合法だった1930年代の裁判闘争を記録したもののだが、たとえ死刑判決を受けようとも、公開の法廷で自分の主張を述べることができればそれで本望。当時の日本共産党の幹部はそう考えたわけだが、それはそれで立派なもの。

それを本作について考えると、少女売春組織を追った『ミレニアム』の担当ジャーナリスト殺害事件の内幕や、元ソ連の情報機関GRUのスパイだったザラのことについて、あまりにも知りすぎたリスベットは、少女買春にも関与していた公安警察の幹部連中にとってあまりにもヤバイ存在。その結果、公安警察内の秘密組織<特別分析班>が下した結論は、「リスベットを抹殺せよ！」だった。まあ、こりゃ秘密組織の鉄則だろうが、リスベットにとっては迷惑千万な話。さあ、リスベットはそんな命の危険から身を守ることができるのだろうか？

これぞジャーナリストの鑑！

一方で、リスベットに命の危険が迫るなら、他方でミレニアム社には少女売春組織を追った特集号の出版をやめなければヤバイぞという脅迫メールが届いていた。『ミレニアム』編集長のエリカ・ベルジェ（レナ・エンドレ）は1度はこれを無視したが、2度、3度と重なるとやはりヤバイ。社員に対して責任を持つ『ミレニアム』編集長のエリカとしては、ここはやはり出版中止？もしそうなれば、ここまで命の危険を冒しながら取材を続けてきたミカエル（ミカエル・ニクヴィスト）はどうなるの？それを納得するの？

3部ではそんなミカエルとエリカのギリギリのせめぎ合いが展開されるから、日本のジャーナリストは必見！もっとも、これぞジャーナリストの鑑と思えるミカエルやエリカほどの決意で、雑誌をつくっている日本の出版社ってどれくらいあるの？

有罪立証より精神鑑定を優先？

私は2010年3月に『名作映画から学ぶ裁判員制度』を出版したが、そこではハリウッド、邦画の他中国や韓国の法廷映画の法的論点を紹介した。しかして本作の後半は、ミカエルの妹で弁護士のアニカ・ジャンニーニ（アニカ・ハリン）をリスベットの弁護士と

した裁判闘争がメインとなる。罪名は殺人未遂罪だが、検察側は国家機密に属する証言が多くなることを理由として裁判を非公開にすることを求めるとともに、有罪の立証よりリスベットの精神病院に送り込むことを優先しようとしたから、こりゃかなり異例。

そこでポイントは、リスベットの精神鑑定をしたのが十数年前にリスベットの精神鑑定をしたペーテル・テレボリアン(アンデルス・アルボム・ローセングール)だということ。こりゃつまり、リスベットの再度の口封じ？



©Yellow Bird Millennium Rights AB, Nordisk Film, Sveriges Television AB, Film I Väst 2009

スウェーデンの法廷闘争も面白い！

リスベットを裁く裁判所は5人で構成されていたが、さてその構成は？北歐諸国は参審制をとる国が多い。ネット情報によれば、デンマークは陪審制と参審制の併用で、フィンランドは参審制の国。そしてスウェーデンは基本的に参審制の国で、1審の地方裁判所では、裁判官1名+参審員3名の参審制、2審の高等裁判所では、裁判官3名+参審員2名の参審制が採用されているらしい。すると計5人はひょっとして私の見間違い？それはともかく、ハリウッド映画とは異質のスウェーデンの非公開法廷における丁々発止のやりとりはハラハラドキドキの連続だから、それに注目！

また裁判は証拠によって判断されるものだから、リスベットが精神異常者で妄想癖のある女だというペーテルの鑑定書の権威で押されると、それに対して何の反証も示せない弁

護則は不利。たしかに、1日目はそうだったが、2日目、3日目になると・・・？

法廷での論戦はアニカの役割だが、証拠集めはもっぱら兄のミカエルの役割。そして、やっとリスベットが無罪らしいと気づいたストックホルム警察のヤン・ブランスキー(ヨハン・シレーン)とソーニャ・ムーディグ(ターニャ・ロレンツソン)もそれに協力。さらに、公安警察内の秘密組織<特別分析班>の存在に気づいた公安警察の良識派(?)もここに至ってやっと行動力を発揮し、成果が見えてきた。公安警察幹部も関与した驚くべき犯罪の全貌とは？

『十二人の怒れる男』(57年)は殺人事件の証拠をめぐる陪審員の判断がポイントだったが、リスベットの殺人未遂罪をめぐる背景事情はきわめて複雑。したがって、目を凝らして観る必要があるが、こんな面白い映画で居眠りすることはないはずだ。『名作映画から学ぶ裁判員制度』の改訂版を出版する時は、是非本作も紹介しなければ・・・。

2010(平成22)年8月3日記

『中国語ジャーナル』を新たな教科書に！

1)あるきっかけで09年4月からNHKのラジオ講座で始めた中国語の勉強は、1年半が経過した。ラジオ講座の教科書は6カ月ごとに変わるから、今年10月からは4回目の新しいシリーズに。また半年を経過した後は、朝だけでなく昼の講座も聴き始めたから、さらに教科書は増えた。毎日15分間ラジオ講座を聴くだけで上達できると思うのは大まちがい！法律でも語学でも、基本は聴くこと、書くこと、読むことの3つ。そして差が出るのは、そのくり返しの集中度とどれだけ時間をかけるかだ。その点、私の努力はすごい。1年経過後は電子辞書を使って1つの漢字や単語から次々とそれに関連する単語をノートに書き写していくという勉強が効いた。今やそのノートは約15冊。日曜日の朝9時から近所の明るいファミレスでこれをやっていると、12時直前まで3時間近

く集中することも多い。

2)そんな中、今年8月からは『中国語ジャーナル』という月刊誌での勉強も始まった。そこで連載されている「チャンツで中国語」や「中国語使い分け指南道場」などは毎回コピーをとって、くり返し聴いているが、メインの連載は本日消息(今月のニュース)。ここでは最新のニュースが10本中国語で語られているから、そのCDを愛用のアイポッドに移し、くり返し聴いていると少しずつ意味がわかってくる。現時点ではこれらのニュースを流暢に読むのは到底ムリだが、たどたどしい発音でゆっくり読みながら、大体の意味を理解することは十分可能。教科書としてはこれで目いっぱいだが、日々この努力を続け、一日も早く新聞を読むことにはもちろん、かなり自由に会話できるようになりたいものだ。

2010(平成22)年10月30日記